



障害をもつ幼児の保育(33)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

寒い冬のさなかS君が亡くなりました。S君は十八歳になっていました。この連載を始めた二〇〇二年八月号に第一回目としてここに取り上げたS君のことを記憶に留めていて下さる方もあるでしょう。

F 私たちがS君のことを取り上げたのは、まったく偶然のことでした。私たちの家でやっている造形教室にS君は両親に連れられて訪ねて来ました。私たちの家は古

い普通の家ですから、他人の家を訪ねることの少ないこの子たちにとっては、興味を引くものがあるらしくあちこちを見て回りました。庭にも出て塀の行き止まりを確かめ、また戻ったりしました。自分の居場所を確かめているような意欲に私たちは心を動かされていつものように会話が始まり、長い連載の幕開けとなりました。

副題につけた『—この子と出会ったとき—』というの

も出会いの喜びの方に重点が置かれていたように思います。いまになると別れへの予感があつて、一層出会つて
いるいまが大切なのだと言いたかつたように思います。

別れのとき

M S君のところではお葬式はしないというので、大好き
きだった自分の家で、お父さんに髭を剃つてもらい服装
を整えて愛育学園の青年部の人たちや職員に囲まれて、
S君はベッドにいました。好物の焼きそばが振るまわ
れ、まさに日常の生活の続きのようでした。

そのときお父さんが話しました。「この子は一生涯何
も悪いことはしなかった。人の悪口を言わず、人をねた
まず生きていた」「だからこの子から私たちは学ぶこと
ばかりだった」と言われました。私はS君の生涯は本当
に高潔なものだったと思ひました。

生まれたときから心臓が悪く、何回も手術や入院を
し、幼いときに話していたのに、耳が聞こえなくなり、
それでも実に忍耐強く生きてきたのですから、お父さん

が「この子は聖人」と言われたのももつとものことで
す。

翌日は家を出てから火葬場の帰りに、好きだった愛育
学園でしばらくのときを過ごしました。この連載の第一
回目話したように『生きて行く場所の把握』をしつかり
として、今度は天国に行つたのです。一生懸命に生き
たという自信は本人ももつていたと思います。入学した
ころは歩けなかつたのが小学二年生くらいから、いざり
歩きをするようになり、見る見るうちに一人で立つて歩
けるようになりました。みんなが行くところはどんなと
ころか、あちこち見たいと思つて、自分から活動を始め
たのです。

F 今は、天国がどんなところか、S君の大きな目で確
かめていることでしょう。目で見ることはもうできない
けれど心に思うことで私たちは出会っています。

子どもの悲しみと大人の悲しみ

F 私は子どものころはよく泣いたのですが、いつの間

にか大声をあげて泣かなくなりました。S君の家から帰ってベッドにもぐりこんで考えていました。

M そのときは神経痛のような体の痛みはもう起こっていただけですか。

F いいえ、一日か二日経って起こりました。もう立てなくてトイレにも這って行きました。考えてみると、私に四人の子どもが生まれ、子育てに夢中のとき父と母と義兄が相前後して亡くなりました。父の死と母の死とは三週間しか経っていなかったのです。自分の子どもたちを私がしっかりとみなければという強い思いが、そのときの自分を支えたのかと思います。どうもそれ以後私はあまり泣けなくなりました。泣く代わりのように体調を崩すことが多くなりました。

いつだったか、娘の一人がそっと「お母さんはどうして泣かないの」とたずねました。それに何と応えたのかは忘れましたが、おそらくとても困って答えられなかったのだと思います。三〇年経ってふと娘が「悲しみのあらわれかたは人によって違う」と言った言葉に慰められ

ました。

私には大声で泣ける子どもをうらやましく思うことがあります。

M 悲しみは子どもの日々の中にもあるのでしょうか。ちよつとお母さんの顔が見えなくなっただけで子どもは永遠の別れのように泣きます。大人と子どもと悲しみの深さは変わらなくても悲しみの表現が違います。

新約聖書の『山上の垂訓』に「悲しむ人々は幸いである」とありますがたとえわずかな時間でも母親から別れることをこんなに悲しむ子どもたちを愛育学園で見ると、この子どもたちは何といとおしい存在なのだろうと思います。

愛育学園では泣く子を母親から離すことはしません。その子が必要とする間は抱いたり、お母さんに同じ部屋でみてもらいます。

F 急いで子どもを離すことより、しっかりと自分の心を味わってほしいと思うのですね。

『泣けてよかったね』

F わたしは最近『HELP』というグループに時々お手伝いに行っています。暴力を受けたり困難な事情を抱えたアジアの女性と子どものためのシェルターです。一月ほど前、一人のお母さんと二歳半の子どもがいました。お母さんが歯医者に行くときその子が大声で泣くので、置いて行くことはこの子の不安を大きくするので一緒に連れて行くことになりました。お母さん一人では無理なので私が介添え役として行きました。歯医者の狭い空間で子どもはここから奥には来ないように言われ、私に抱かれ大声で泣くのです。お母さんの姿が見えるのに私に抱かれたというだけでこんなに泣くのは、それまでの経験から不安が強いからでしょう。しかし、そんなことは他の人には分かりません。待合室の人たちはいやな顔をしますし、歯医者さんもその助手の人も何度も「泣かないで！」と厳しく言います。はじめ私は何とか泣かせないように揺すったり歌を歌ったりしま

したが、まったく泣き止みません。するとこわい顔の先生がほんの少しだけお母さんのそばに寄ることを許してくれました。私はこの人たちが特別厳しい人ではなく、ただ子どもが泣くということにみんな慣れていないのだと気がつき、私も気が楽になりました。その気持ちが伝わったようで私の腕の中でしゃくり上げながら体が柔らかくなってきました。少し私に心を開いてきたようです。

M それでどうしたの。

F やつとのこととで治療が終わりコンビニで約束のおやつを買ってもらって帰ったというだけのことですけれど、『HELP』に帰ってその話をしたときスタッフの



人たちが『いっぱい泣けてよかったね』と言ってくれたことが私にはとてもうれしかったのです。以前『泣かないで』と言われていて、とても切れ易かったこの子がいっぱい泣いたからか、人に乱暴をすることがずつと少なくなりました。

別れた手には新しい別の手が差し伸べられる

M 私も以前よく遊んだK君のことを思い出します。K君は私の顔を見ながら手を引き、好きな本を何度もいっしょに見ました。その本というのはお相撲さんの顔の写真の出ているものです。はじめは気がつかなかったけれど、やがてこの子が人にはいろんな表情があつて人の内面と関係があるらしいと学んでいたのだと発見しました。その前はK君はあまり表情がなかったのです。自分の思いを表現してもよいということ、愛育では励ましています。表現の下手な子もだいに自然なものになり、大人になるころは相手のことも考えながらゆとりをもって表現しています。

F そのころにはあまり手を引かなくなったのではありませんか。

M そうなんです。いろいろな人の手を引くようになり私の手を離すようになりました。離れた手は新しい別の人の手と心が用意されているのでしよう。そんな希望をもっているから、成長していく子を見守り、卒業するまで励まして新しい道へ送り出すことができます。

出会ったときに丁寧につき合っていれば、一人一人に必ず未来が開けることを、私は疑いません。

一人一人の中にある『よい種』を親も先生もいっしょに育てていきましょう。

別れのときは新しい出会いのときでもあります。

一人一人の中にある『よきもの』を信じていきましょう。
(保育研究者)

☆この連載は今回で終わります。